

平成22年 5月30日現在

研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19530625  
 研究課題名(和文) 高機能広汎性発達障害児者の自己意識の発達の变化に関する基礎的研究  
 研究課題名(英文) Research for Developmental Change of Self Awareness with High Functioning Pervasive Developmental Disorders  
 研究代表者  
 木谷 秀勝 (KIYA HIDEKATSU)  
 山口大学・教育学部・准教授  
 研究者番号：50225083

研究成果の概要(和文)：今回の3年間での調査研究では、高機能広汎性発達障害児者(HFPDD)の自己意識の発達の变化についてHFPDD計41名(女性9名)を対象に調査した。具体的には、WISC-III(WAIS-III)知能検査、○△□物語法、人物画、CAT(TAT)を比較検討した。その結果、自己意識の転帰として、9・10才、14才、17才、20才で変化が生じることが示唆された。また、自己意識の安定のために積極的な環境調整が重要であり、その成果が高校年代で生じることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：This research for 3 years aimed to developmental change of self awareness with 41 High Functioning Pervasive Developmental Disorders(HFPDD). WISC-III(WAIS-III), Clinical Drawings, CAT(TAT) were examined. In result, turning points of self awareness with HFPDD occurred 9 or 10, 14, 17, 20 age. In discussion, it was clarified that active environmental adjustment was important for stabilities of self awareness and was fruitful for stable high school life.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：高機能広汎性発達障害、アスペルガー症候群、高機能自閉症、自己意識、

## 1. 研究開始当初の背景

高機能広汎性発達障害児者（以下、HFPDD）の自己意識に関して、臨床的実践と木谷（平成 17・18 年度の科学研究費の調査研究，2007）の研究成果から、児童期から成人期の発達過程全体において、一貫性の揺らぎとしての「本来の HFPDD としての自己」と「学習の中で獲得された社会規範のなかで適応しようとする人間としての自己」との葛藤状態が生じやすい。能動性の混乱（特に、情報の統合性の障害）によるこだわりや強迫性の問題。そして、共有性に関して、発達に応じて、家族や一部の他者との関係性は成長しても新たな環境での知覚・感覚的レベルの混乱から生じる言語・認知レベル（言語的コミュニケーションの問題）に大きな影響を与えることが明確になった。

しかしながら、HFPDD がもつ社会適応上の問題に対する横断的な視点と合わせて、自己意識が発達的（縦断的視点）にどのように変化していくかを検討する必要性が出てきた。特に、9・10 歳での大きな変化と臨床的に推測している 14 歳・17 歳・20 歳前後での大きな転帰を中心にして、HFPDD の自己意識の発達の变化を継続的に調査することが今後の大きな課題だと考えた。

## 2. 研究の目的

以上の学術的背景を元に、3 年間で次の 2 つの問題点を明確にすることを目標とする。

### (1) HFPDD に対する継続的な調査

先の述べた研究目的を明確にするために、平成 17・18 年度に調査した HFPDD、新規に平成 19 年度に初めて調査を実施する小学 1 年生から成人までの HFPDD を対象として、3 年から 5 年間の長期的な追跡調査を実施して、自己意識の発達の变化に関わる要因を詳細に分析することを目的とする。

### (2) 発達支援を進めるための予防的配慮への提言

発達の变化に関わる要因の分析を通して明確になった自己意識の発達の变化とそれぞれの発達段階での課題を整理することで、学校での特別支援教育、就労支援や家庭での支援を効果的に進めて、予防的な配慮ができるように小冊子の作成を行う。同時に、平成 21 年には、山口・東京・福岡において成果報告会を実施することを目的とする。

## 3. 研究の方法

### (1) 平成 19 年度の研究計画

①対象児：平成 17 年度に調査した HFPDD20 名（4 名女性）と、新規に調査する HFPDD 21 名（6 名女性）の計 41 名を対象とする。なお、調査依頼については、調査内容を説明して、保護者の同意、さらに必要によっては本人の同意を取った上で、対象とする。

②調査方法：基本的には平成 17 年度の調査方法と同様の方法で実施する。具体的には、WISC-III（WAIS-III）知能検査、臨床描画法（○△□物語法、人物画（1 枚法））、CAT（児童用絵画統覚検査、成人は TAT）、そして、診断の妥当性を検討するために、（財）日本自閉症協会が作成した PARS（広汎性発達障害日本自閉症協会評定尺度）を実施する。

### (2)平成 20 年度の研究計画

①対象児者：平成 18 年度に調査した HFPDD6 名（2 名女性）と、新規に調査する HFPDD2 名の計 8 名を対象とする。

②調査方法：平成 19 年度と同様とする。

### (3) 平成 21 年度の研究計画

①対象児者：平成 21 年度の対象児者は計 38 名（10 名女性）になる。そのうち小学生から高校生までの対象児として、平成 17 年度・19 年度と合わせて 3 回目の調査対象児は 19 名（1 名女性）になる。平成 19 年度と合わせ

て2回目の調査対象児は8名(4名女性)で、平成17年度と合わせて2回目の調査対象児は、平成17・19年度の2回実施が3名(すべて女性)、平成17・21年度2回実施が1名である。調査が取れなかった理由は、調査時点では強い精神的混乱が生じていたため検査の実施を拒否したことによる。

青年期(主に大学生)から成人期までの対象者は平成18年度と合わせて2回目の調査対象となるのは5名(3名が女性)になる。

②調査方法:平成19・20年度と同様とする。

(4)分析方法

①WISC-Ⅲ(WAIS-Ⅲ)知能検査:言語性・動作性・全検査IQと実施した10項目の評価点のそれぞれを、個別に前回の結果と比較する。さらに、小学生から高校生、青年期でそれぞれの結果の平均値を算出して、発達的变化を比較検討する。また、5年間追跡調査でできた場合には、その変化も算出する。

②○△□物語法:○△□物語法の想像性の発達段階を前回と比較する。また、5年間追跡調査できた場合には、その変化も比較する。

③人物画:それぞれの人物画を「不器用さ」の視点から分析、比較する。

④CAT(TAT):それぞれの反応とともに、選択してもらった「好きなカード」と「嫌いなカード」の変化を分析、比較する。

#### 4. 研究成果

(1)WISC-Ⅲ及びWAIS-Ⅲの継続的調査の結果からの考察

①言語性の特徴

言語性に関しては、VIQの発達的变化をみると、小学3年-5年、中学1年-3年、中学3年-高校2年で低下している。このうち、最初の2つの発達段階は一般的な発達課題でもある10才の壁と思春期の特徴が顕著になりやすい時期と重なる。しかし、中学3年-

高校2年に関してはWISCとWAISとの切り替えの段階とも重なっていること、また、高校入学後に学力面で自信を低下させている状態があり、こうした要因が大きいと考えられる。ただし、子どもから大人社会へ向けての移行期としてとらえると、この段階で中学校から高校への移行支援と高校以降の支援の重要性が示唆されることは確かである。

また、それぞれの項目の発達的变化の特徴をみると、小学校の前半ではまだまだ視覚優位な情報処理としての「知識」「算数」「理解」の伸びが特徴になっている。ところが、10才の壁を迎える前後の発達段階では、それまでの視覚有意な認知構造だけでは限界になってくるが、その一方で認知操作的な課題遂行も困難な状態になりやすい。したがって、「知識」「単語」といった語彙数は確かに蓄積されていくが、そうした情報を状況に即して適切かつ柔軟に表現することはかえって混乱しやすい状態になる。さらに、思春期になるとその混乱が強化される。そして思春期が一段落して、高校受験へ向かう中学3年以降では「算数」「単語」「理解」といった認知操作と統合性を要する課題への達成度は高くなるが、「類似」といった抽象的な概念への認知操作は苦手なままである。

「類似」では、これまでの研究(石坂,1997)でも、高機能自閉症では苦手だと報告されているが、今回の結果から、その発達的变化としては大きな変化は見られないことがわかる。

②動作性の特徴

動作性に関しては、動作性IQの発達的变化としては、小学1年-3年、中学1年-3年、中学3年-高校2年で低下するが、全体をみると確実な成長を遂げていることがわかる。特に、小学校の高学年、中学校2年、高校以降である。その共通点として、それぞれの学校環境への慣れが第一に重要であり、こ

うした環境的な安定感が基盤としてさらに課題遂行が高まることが示唆される。

それぞれの動作性項目の発達変化では、全体を通して、「配列」の伸びが大きく、特に思春期での伸びは大きい。しかし、この伸びは注意しておかなくてはならない。それは「配列」の大きな伸びは小学3年～5年でも見られるように、発達の移行期に特徴的であり、それは木谷（2008e）が指摘しているように、「成長するからこそ生じる新たな問題」を生み出す過敏性や強迫性にも通じる要因でもある。また、「符号」は課題が難しくなる小学校低学年では大きく低下するが、中学校以降は伸びて、「積木」の伸びと合わせて情報の整理が思春期以降に安定してくることがわかる。

その一方で、「組合」が全体を通して低下するか、伸びが見られない状態がある。こうした状態に関しては、3つの視点を検討する必要がある。第一に、視覚的な課題処理から全体をバランスよく考えながら作業するために、エラーというよりも時間がかかるようになっていくこと。第二に、検査時間全体を通して、バランスよく、しかも適度に力を調整しながら課題遂行を進めるのではなく、最初から力を入れ過ぎるくらいに頑張ってしまう、最後は力尽きてしまうこと。第三に、この「組合」が最後の課題でもあり、ただでさえ HFPDD には苦手な課題であるうえに、それ以前の課題ができなかったことによる自信の低下から課題遂行が低下すること。以上である。

### ③言語性と動作性の相互関係の特徴

主に5年間の変化（図7）からわかるように、発達の变化の長期的な経過では、小学校では言語性が伸びる一方で動作性は低下する傾向にある。この状態は、視覚的・直観的な認知パターンが強いため、動作性では、課題遂行での混乱が強くなることが要因として考えられる。しかしながら、中学校になると、

柔軟性ある言語性の状況判断への苦手さが強く見られ、その一方でだんだんと中学校の環境にも適応して状況や課題を整理しながら全体の行動の進め方をバランスよく「配列」できるようになり（木谷，2009f）、その成果として、高校受験のための概念的学習や5教科全体を総合的に関連させながら理解することが可能になる。その成果として、高校での適応にもつながると推測できる。

### ④青年期以降の発達の变化の特徴

青年期以降の発達の变化に関しては、次の2点が大きな特徴と認められる。

第一に、それぞれのIQの変化からみても、全体的な情緒的安定感は動作性IQの伸びと相関することが予想される。しかも、その成長は20代以降も維持される。ただし、今回の30代以降の2名は、主婦（一人は塾をしているが）のために、今後は30代以降の男性の対象者での調査を行う必要がある。

第二に、言語性の結果からわかるように、言語性の発達の变化は、青年期以降の場合には、それぞれの対象者が置かれている環境への適応パターンに応じた言語的能力の獲得の要素が強い。簡単な言い方をすれば、その状況に合った適応パターンを身に付けることができるような柔軟性が高くなる傾向である（木谷他，2009）。逆に言えば、それを切り替えられない場合には、HFPDD特有の抑うつ的な精神状態に至りやすい。ただし、こうした特徴についてもさらに対象者を多くした調査が必要である。

### (2)○△□物語法の継続的調査の結果の分析

○△□物語法の想像性の発達の变化を概観する。その結果、小学校6年間を通しての発達の变化ではⅢ-1段階までに大半は成長するが、そこにはまだまだ主観的・直観的な想像性のパターンが顕著に表れやすい。その背景には、小学校という環境への適応が進み、

視覚的・直観的な認知パターンが周囲からも受け止められやすい教育的配慮のもとで、HFPDDの表現力に自由さと自信が生まれやすいためと考えられる。

ところが、思春期になり、一部はⅢ-2～Ⅳ段階までに想像性を豊かにしていくが、大半は停滞気味になる。その背景としては、小学校までのような自由さや自信の高さが揺らぎ始めたり、思春期特有の「面倒くささ」が態度にもはっきりと表現される場合がある。

さらに、中学2年以降になると、かなりそれぞれのHFPDDの体験内容が豊かになり、同時に自分自身を客観的に見つめる視点が可能となり、物語全体の展開と想像性の豊かさが広がってくる特徴が強くなる。

こうした特徴も青年期では維持されるが、20代以降では、生活面や対人関係がある程度パターン化して、それが精神的な安定感にもつながっているが、同時に想像性の発達の変化としてはある意味限界になる要因になりやすい。したがって、元々芸術的素養をもっているHFPDDやIQが100以上あり、まだまだ知的好奇心が強い場合には、想像性の発達の変化が維持されることも示唆された。

### (3)人物画及びCAT (TAT) の発達的变化

それぞれの投影法に関しては、全体的な発達的变化は認められない結果となっている。その背景として、人物画において「不器用さ」を中心的に検討した場合、成長とともに「不器用さ」が顕著になり、改善されることが少ないことが示唆される。

また、CAT (TAT) に関しては、IQと相關することなく、全体として状況判断が表面的、直観的な傾向が継続することは示唆される。

この結果から判断しても、HFPDDの障害特徴の基本的症状は改善されることはなく、むしろ、後天的な家庭や学習環境への配慮や支援を通して、本来持つ健全な認知的側面が

伸長する要因が強いことが示唆される。

なお、それぞれの個別的な発達の変化に関しては、今回の成果報告では省略する。

### (4)全体考察

#### ①HFPDD にとっての環境的要因が果たす重要な役割の問題

従来からの受け身的に環境を与えられるのではなく、より能動的に環境作りを継続する過程を通して、次に述べるHFPDDの自己意識も一貫性をもち、能動的に、他者との共感的コミュニケーションを広げることが可能になると考えている。

#### ②その基盤に立脚した自己意識の発達的变化への理解と対応の進め方

HFPDDの自己意識の発達的变化への理解と対応を効果的に進めるための視点を明確にしたい。それは次の4点に集約される。

- ・早期からの診断と対応
- ・「成長するからこそ生じる新たな問題」への理解
- ・「心の世界」の豊かさと傷つきやすさ
- ・高校年代及び青年期以降の支援の重要性

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

①木谷秀勝、北山修、高機能広汎性発達障害児者の家族支援に関する臨床心理学的研究—「家族らしさ」の視点から、九州大学心理学研究、11巻、225-234、2010、査読有

②木谷秀勝、川口智美、美根愛、豊丹生啓子、原菜つみ、複数同胞のアスペルガー症候群がいる家族への理解と支援—遺伝と環境との相互作用の視点から、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、9号、131-139、2010、査読無

③木谷秀勝、高橋賀代、川口智美、美根愛、高機能広汎性発達障害児の発達的变化、山

口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、28号、105-114、2009、査読無

- ④木谷秀勝、高機能広汎性発達障害の高校年代の支援、児童青年精神医学とその近接領域、50巻2号、31-39、2009、査読有
- ⑤木谷秀勝、川口智美、美根愛、ウェクスラー式知能検査の臨床的活用－WISC-ⅢとWAIS-Rを用いた縦断的活用の効果、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、27号、85-97、2009、査読無
- ⑥木谷秀勝、描画による広汎性発達障害児の理解と対応－「広汎性発達障害児として生きる」視点から、臨床描画研究、23巻、35-48、2008、査読無
- ⑦木谷秀勝、高校における特別支援教育の役割について、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、25号、387-398、2008、査読無
- ⑧木谷秀勝、山口真理子、高橋賀代、川口智美、WISC-Ⅲの臨床的活用について－双方向的な視点を取り入れた実践から、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、23号、143-150、2007、査読無
- ⑨木谷秀勝、高橋賀代、宮崎佳代子、「○△□物語法」からみた高機能広汎性発達障害児の「想像性の障害」について、西日本芸術療法学会誌、35巻、61-65、2007、査読無

[学会発表] (計6件)

- ①木谷秀勝、川口智美、美根愛、坂本佳代子、山下稔哉、原田剛志、中庭洋一、高機能広汎性発達障害者の大学での適応と支援－WAIS-Ⅲの変化からの分析、第50回日本児童青年精神医学会総会、2009年10月1日発表、京都市
- ②川口智美、木谷秀勝、美根愛、原菜つみ、豊丹生啓子、原田剛志、中庭洋一、複数同胞のアスペルガー症候群がいる家族への

理解と支援、第50回日本児童青年精神医学会総会、2009年10月1日発表、京都市

- ③木谷秀勝、坂本佳代子、川口智美、高橋賀代、中庭洋一、高機能広汎性発達障害児の自己意識の発達の变化－WISC-Ⅲと臨床描画法の2年間の变化を中心にして、第49回日本児童青年精神医学会総会、2008年11月7日発表、広島市
- ④川口智美、木谷秀勝、美根愛、中庭洋一、成人期アスペルガー症候群への就労支援への試み－双方向的心理検査の活用と外部機関との連携を中心に、第49回日本児童青年精神医学会総会、2008年11月7日発表、広島市
- ⑤美根愛、木谷秀勝、川口智美、中庭洋一、WISC-Ⅲの臨床的活用について－縦断的な知能検査の活用について、第49回日本児童青年精神医学会総会、2008年11月7日発表、広島市
- ⑥木谷秀勝、宮崎佳代子、山下稔哉、高校における特別支援教育の役割に関する一考察－アスペルガー症候群の一症例を通して、第48回日本児童青年精神医学会総会、2007年11月1日、盛岡市

[図書] (計1件)

- ①木谷秀勝、学齢期の対人関係力を育てる、発達障害の臨床的理解と支援－学齢期の理解と支援 (石井哲夫監修・安達潤編)、金子書房、77-102、2009発行

[産業財産権]

- 出願状況 (計0件)
- 取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等 特になし

## 6. 研究組織

- (1) 研究代表者  
木谷 秀勝 (KIYA HIDEKATSU)  
山口大学・教育学部・准教授  
研究者番号：50225083
- (2) 研究分担者 なし
- (3) 連携研究者 なし